ふと思い立つと

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふと思い立つと

【Ｎコード】
Ｎ０５８４Ｈ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
正好と希はどちらもパスタとワインが大好き。ある日正好は店で見事なパスタとソースを買って帰るがワインを買い忘れたことに気付いてしまう。ところが希は希で。時計と櫛のお話を少しアレンジしてみました。

第一章

ふと思い立つと

矢車正好はパスタが大好物である。それに赤ワインがあればなおよい。この二つの組み合わせさえあれば何も文句はない男だった。

その彼の恋人である長田希もまた同じであった。彼女もパスタと赤ワインが大好きで飲む時は大抵この組み合わせだった。家でも外でもそれは同じだった。

勿論二人共そのことはよく知っていてお互いの家の中でもデートでもパスタに赤ワインだった。このことは周りにもよく知られていた。この日も会社の帰りの時に周りからからかい半分で声をかけられて言われるのだった。

「デートか？今から」

「ああ、そうだ」

穏やかな顔で同僚達の言葉に応えるのだった。

「で、今日もデートの帰りあれだろ」

「イタリアンレストランだよな」

「ああ、そうだよ」

正好は笑って答える。黙っていれば背は結構高くすらりとしていてモデルのようである。目は少し鋭いが引き締まっていて頬が適度に痩せたいい顔をしている。額が少し気になるのか髪を上から下ろしている。

「今日もな。何を食べようかな」

「何ってパスタじゃないか」

「それで何を食べるっていうんだよ」

「パスタっていっても種類があるだろ？」

しかし彼はここでこう言うのだった。

「何種類もな。違うか？」

「スペゲティにマカロニにペンネにフェットチーネ」

同僚の一人が述べた。
「そういえば結構あるよな」
「種類もな」
「それにソースもな」
正好の言葉は続く。
「色々あるだろ？ミートソースとかだけじゃなくてな」
「だよな。トマト使う野茂あればボンゴレもあるしな」
「シーフード、いいよな」
皆それぞれパスタのソースについても話をはじめた。
「あとイカ墨な」
「ああ、あれいいよな。美味いの何のって」
「俺ペンネアラビアータがいいな」
「だからだよ。ワインだって何種類もあるんだ」
正好はワインについても語るのだった。
「それこそ一生かかっても食べきれないだけあるさ。だからパスタとワインには飽きないんだよ」
「希ちゃんもだよな」
彼女の名前も皆知っていた。それだけ公になっている付き合いなのだ。
「あの娘もやっぱりパスタが好きなんだよな」
「そうさ」
また笑ってその皆の言葉に答える正好だった。
「当たり前だろ、それって」
「当たり前とは思わないけれどな」
「まあそれでも。あの娘もパスタ好きなんだな」
「それとワインもな」
やはりプラスアルファだった。
「お互い好きなんだよ。だからいいんだよ」
「何か完全に似た者同士なんだな」
皆その話を聞いて思った。

「パスタにワイン好き同士で」
「そうなんだよな。パスタもワインも美味いし」
正好の言葉はそれに留まらなかった。さらに言うのだった。
「それに身体にいいしな」
「トマトのビタミンとワインのポリフェノールだったか？」
「あとはパスタのオリーブオイルか」６
「そうさ。赤は身体にいいんだよ」
正好はにこにこと笑って語るのだった。
「赤い色の食べ物はね。もっともパスタは赤くなくても好きだけれどね」
「やれやれ、これは本物だな」
「全くだよ」
皆こうしたことをいつも言って希と共に食べて飲んで楽しんでいる彼を見て目を細めていた。そうしたある日のことだった。
いつものように帰り道でパスタとワインのことを考えていた正好。立ち入ったスーパーの中でこれまたいつものようにパスタを物色していた。ワインは専門の店で探している。今はパスタであった。

第二章

さて、何があるかな？」

とりあえずよさそうなものを探している。スパゲティも太いものもあれば細いものもある。そしてラザニアにマカロニにペンネに他のマカロニ状のパスタも多くある。

その中で彼がふと目に入ったものはフェットチーネだった。イタリアから直輸入のこれまたかなり質のいいフェットチーネであった。

「あっ、これは」

彼はそれを見てすぐに声をあげた。

「いいフェットチーネだな。これはいい料理ができるな」

このことをすぐに確信したのだった。

「茹でてそれでオリーブオイルをかけて」

すぐにここまで考えていく。

「それからソースは。そうだな」

ちらりとソースのコーナーを見る。そこにはイカ墨の缶詰があった。イタリアンパスタの定番の一つにもなっているネーロのソースである。

続いてそれを手に取る。そうして今度は野菜のコーナーに向かう。するとおあつらえむきにこれまた上質のトマトと大蒜があった。

「天の配剤ってやつかな」

彼はそのトマトを大蒜を手に取ってさらに微笑むのだった。

「明日は休日だから匂いを気にすることもないし」

その大蒜を食べた後の独特の匂いである。これが嫌がられるのは言うまでもない。だから彼は普段は大蒜を使わないパスタを食べている。しかしこれがパスタの味を考慮するにあたってはあまりよくないのも事実だ。やはりパスタには大蒜が必要なのだ。イタリア料理には。

その上質の大蒜、それにトマトを手に取った。これで野菜も手に

入った。
それだけに終わらず今度は魚介類のコーナーに向かった。するとこれまた新鮮で見事な烏賊まであった。彼はその烏賊をすぐに籠に入れてしまった。
「神様が僕に言っているね」
にこやかに笑ってそう考えるのだった。
「ネーロを作れってね。フェットチーネの」
かなり前向きな考えであった。
「よし、これでかなり高得点だけれど」
しかしまだ完璧ではないのだった。
「後は」
今度は乳製品のコーナーに向かった。すると粉チーズのいいのがあった。しかも今度もイタリアからのだ。それまであったのだ。
「画龍点晴を欠くという事態はなくなったね」
その目にあたるものも手に入れたのだった。そうして意気揚々で家に帰り早速料理をはじめる。トマトに大蒜も自分で切ってパスタを茹でそうして買い置きしてあった唐辛子も使う。そうしてソースから何から何まで自分で作っていた。しかしここで彼は肝心なことを忘れていたのだった。
「あっ、しまったなあ」
パスタを茹でる鍋の水が沸騰したことを確認したところでそのことに気付いたのだった。
「パスタはいいけれどワイン忘れたよ」
思い出したのはこのことだった。
「肝心のワインの。どうしよう」
台所の時計を見る。今から行っても行きつけの店は閉まる時間になる。もう手遅れだった。
「このパスタに合うワインは思いつくけれど」
それはあるのだった。しかしだった。
それを手に入れることはできない。このことにジレンマを覚えて

いた。どうしようもないまでに。そしてもう一つ問題があるのだった。
時間がないのだ。もう。携帯のメールで希はもう帰るとメールしてきている。それを見るととても時間がない。最早どうしようもなかった。
「参ったな、ワインなしのパスタか」
それは彼にとっても希にとっても完璧なものではなかった。かろうじて半分がある、その程度でしかないものであった。そう、半分でしかないのだ。
「仕方ないな。適当にビールでも出すかな」
一応は用意してあるのだった。しかしあくまで一応である。そのことに嘆息するしかなかった。そうして彼女がそろそろ帰るかと思っているとだった。
家の扉が開く音が聞こえてきた。そうして台所にもその声が聞こえてきたのだった。
「只今」
「ああ、おかえり」
まずはこうその声に応えるのだった。
「今帰ったんだね」
「ええ、ただね」
不意にその声が寂しいものなったのがわかった。大人の女のその声がだ。
「御免なさい」
「御免なさいって？」
「パスタ買おうと思っていたのよ」
やって来たのは背の高い女だった。大きな目は少し吊り上がり気味で口はやや大きく微笑んだような形になっている。鼻は小さく然程目立たない。全体的に目が目立っておりそれに合わせたかのような切れ長の眉と長い茶色がかった髪が印象的である。言葉には少し秋田訛りがある。正好も背は高く顔立ちは彫がある男前と言っても

いい顔だがその彼と似合っていると言える大人の女であった。
「パスタね」
「パスタを？」
「けれど御免なさい」
その秋田訛りの言葉でまた謝ってきた。申し訳なさで満ちた声で。
「それ、忘れちゃったのよ」
「またどうして？」
「ワイン探すのに夢中で」
だからだというのだった。
「ワイン。いいのがあったのだけれど」
「ワインはあったんだ」
「ええ。バローロ」
そのワインの名前を今言う。ピエモンテ産のイタリアの銘酒である。

第三章

「それ見つけたんだけれど」
「あっ、バローロを？」
バローロと聞いて正好も思わず声をあげた。
「それがあったんだ」
「そうよ、しかも安くて」
おまけに安いという好条件まで重なったのだった。
「四本買えたわ。一人当たり二本ね」
「凄いね。じゃあ今日はバローロでパーティーだね」
「けれど。パスタが」
しかしここで希はまた残念な声を出すのだった。
「それがないから。肝心のパスタが」
「ううん、それはいいよ」
正好は声を笑わせて話した。
「それはね。気にしなくていいよ」
「あれっ、そういえば」
ここで希は部屋の中の匂いに気付いたのだった。その匂いに。
「この匂い。大蒜にオリーブに」
「そうだよい。ネーロのソースはもうできてるよ」
笑った声のまま彼女に述べた。
「そして後はパスタを茹でるだけだね」
「パスタって。それはもう」
「やっぱりあれだよね。ワインがいいのを手に入れてそれに気を取られてパスタ買うの忘れたんだよね」
「ええ、そうよ」
希はその理由も今彼に話した。話しながらとりあえず自分の部屋に向かう。ワインはテーブルの上に置いておきそのうえで部屋の中で着替えるのだった。その自分の部屋から彼に応えるのだった。

「だから。それは」
「僕も同じだったんだ」
正好はここでまた声を笑わせた。
「いいパスタやソースの材料は手に入れたけれどそれに浮かれてワインを買い忘れて」
「それでだったの」
「正直それでどうしようかって思ってたんだ」
彼もまた自分のことを素直に話すのだった。
「けれどね。君がワイン買ってきてくれて」
「それで助かったのね」
「そういうこと、いや一時はどうしようかって思ったよ」
このことも話した。
「こっちもね」
「ワインを忘れたからね」
「うん。やっぱりワインがないと」
彼はやはりこのことを気にかけているのだった。
「どうしようもないからね、本当に」
「そうよね。私もね」
結局のところ彼女は同じなのだった。
「ワインはあってもパスタがないと」
「そうだよね。けれど本当によかったよ」
正好の顔は心から笑っているものになっていた。
「希ちゃんがワイン買ってきてくれていて」
「私もよ。正好君がパスタ買ってきてくれてたから」
言いながら部屋から出て来ていた。ラフにジャージをはいて上着もパーカーになっている。本当に楽に動ける格好になっているのだった。
「おかげで。ほっとしてるのよ」
「あれかな。やっぱり」
ここでそのフェットチーネを鍋の中に入れてそのうえで話す。

「お互い好きだからな」
「好きだからなの？」
「そうだよ。お互い好きだから」
にこりと笑って話す正好だった。
「だからこうやって揃ったんだよ」
「パスタとワインも」
「そうだよ。その二つが揃ったのはね」
お互い好きだというのだ。
「パスタとワインが好きだから」
「心が通じ合ってなのかしら」
「何かさ、こんな話あったよね」
正好は今度は鍋の中のパスタを捌いていた。そうしてそれによりパスタがくっついてしまうのを防いでいた。そのうえでソースの用意にもかかっていた。
「あれは時計と櫛だったけれど」
「私達はあれね。パスタとワイン」
希は希でワインのコルクを抜いている。そうしてグラスにそのワインを注いでいた。ガラスのグラスにワインがかかってそのうえでグラスを紅く染めていた。
「何か全然違うわね」
「いいじゃない。そこにあるのは同じなんだから」
正好はこう言うのだった。
「そうじゃない？僕希ちゃんに食べてもらいたかったし」
「私は正好君に」
実は二人共一人だけだったならばここまで凝らなかったのである。一人ならもっと質素に済ませることがいつもだったりする。もっと安く手早く作られるパスタにそれと安いワインでだ。
「飲んでもらいたかったから」
「そういうことだね。じゃあ茹で終わったよ」
「ええ」

「ソースもできたし。後はね」
「そうね。食べましょう」
もう向かい合った席にそれぞれワインを置いている希だった。正好は出していた皿の上にパスタを入れていく。もうソースを絡めていて真っ黒になっているパスタをだ。
「二人でね」
「ええ、二人でね」
笑顔で言い合う二人だった。そうしてそのうえでワインを飲みパスタを食べる。二人で飲み食いするワインもパスタも実に美味かった。それは一人で食べるよりも遥かに美味いものだった。

ふと思い立つと　　完

２００９・５・１１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0584h/

ふと思い立つと

2010年10月8日15時36分発行